

# 文字と庭とペン、そして文字

佐賀通

## プロローグ

唯一僕が知っているのは、僕は何でも知ることができるのではないかということだ。何でも知ることができることだけを知っている。なんだかこれも矛盾したように思えるかもしれないけど、多分これであっているはずだ。僕の周りには何でも知っている人が四人いて、僕を励まし、褒め称え、時に鼓舞し、そして何より幸せを願ってくれた。

友人はいつだって唐突にあらわれ、父はいつだって不規則に歩き、先生はいつだってまっすぐに進み、そして彼女はいつだって笑っていた。

僕がそんな四人とふれあっていくうちに、僕だけじゃなく、僕が誰か別の人の幸せを願うのも、それはそれで自然な流れであるような気がする。

当然、逆境はある。それは避けられないものだ。でも僕はとにかく彼女に思いを伝えなかったし、そして届いて受け入れられて欲しかった。逆境があり、それでも僕は伝えようとする。それは少し恥ずかしい思い出ではあるのだけれども、今でもからかわれる思い出ではあるのだけれども、僕としてはすごく貴重で、大切に、もう二度と体験することがない、忘れたくない思い出だ。

「まるで禅問答だ」

「そんないろいろな人たちがずっと言ってきた言葉を友人はポツリと漏らす。意味はよくわかっていないし多分これからもずっとわかることはない気がする。でもそれはきつと悲しいことじゃない気がする。意味を色々知るということは多分大事なことなのだろうけど、でも僕がこれから語っていく想い出の中で、それはいくらだつて避けようとする事ができる逆境のはずだ。僕はずっと友人の漏らす「まるで禅問答だ」は彼が彼自身に言い聞かせ、そしてなにか彼自身が一つ新たな言い回しとして獲得することができた言葉の列なんじゃないかと思つた。

友人に言わせればそれはどこまでも突き抜けた阿呆な考えらしくて

「なにも考えなくても、こんなことはいつだつて言えるものじゃないか」

と笑つて答えを返された。なるほど、確かに意味を知つていても知らなくてもこんなことはいつだつて言える。

ふとした瞬間に僕は友人、父、先生、彼女との距離感を測りかねることがある。それはなにかありきたりなことではあるけども、訪れずにはいられない感覚ではあるのだけれど、その感覚が来るたびに僕は何か煮えきらない、サイクルヒット目前でなぜかシングルヒットだけ打てなかった、みたいな気持ちになる。それが何か距離感がつかめ

ない、ということになるのだろう。

「その例えは、微妙だわ」

彼女は僕にそう言った。

「私と一緒に、これを読んでくれない？」

そんな言葉が、僕と彼女が交わした最初の言葉だったはずだ。僕はそれまで彼女について知っていることなど一つもなかった。でもその言葉をきっかけに、僕は彼女についていろんなことを知ることができた。文字が読めるけれども読めないということ、数学が苦手だということ、好きな音楽や映画、小説、そんなごく他愛もない彼女の好きなものや苦手なものを知った。

彼女いわく、そんな他愛もないことがだんだんとつながっていき、いずれ同じ場所へと導いてくれるらしい。なるほどな、とは思う。思うけれども、でもそんなこと、彼女から教えてもらわなくとも僕にだってそんなことはわかつている。彼女から教わることは、いつだって僕が知らないものであるのだけれども、このことだけは、僕にだって思いつけるなんともありきたりなことのような気がして、なんだか反抗心みたいなものを持ってしまった。別にそんな変な反抗心を持ったからといって僕と彼女の仲が変になるなんていうことは絶対ないし、変になったとしても、きつとまた元の関係に

戻れる。

元の関係に戻れる方法を、僕の先生は知っている。だからきつと大丈夫だ。先生の教えが正しいことは、僕だけじゃなく、友人だって知っている。

僕としては僕の願いを叶えることで、先生の教えが間違えないことを証明したかったし、先生だけでなく、願いが叶うことを望んでくれた父のためにも、僕は彼女の隣に居続ける必要があった。もちろん一番大事なのは僕自身のためだ。どこまでも達観した様子で彼女は文字が読めないことと読めることについての思い出を今日も僕に語る。

結局のところ、なぜ友人は文字を読むことができたのだろうか。書いている方としてはまるつきりデタラメな並びをただひたすらと友人に見せているだけなのであり、その魅せられた文字をみながらふんふん頷いている友人を見てみると、実は友人自身もよくわかっていないままわかつているふりをしているのではないかと勘ぐってしまう。それでも、友人は確かに読めていた。読めていたのだ。後に綴られる長い長い文字列は友人の目でもって確かに意味を見出され、それが伝えられるべき相手へと伝わった。伝えられた相手はきちんとその文字列を理解し、そして返事をくれた。友人のアドバイスは決して虚勢ではなく、確かな確固たる自信の元、僕に与えられたものだった。

友人にはもちろん感謝しているし、多分だとは思うのだけれど、彼自身が文字を読む

ために彼自らの力であの文章の意味を見つけ出したんだと思っている。それはきっと簡単なことではないはずで膨大な時間をかけ探し出したんだと思う。全部僕のためにそこまでやってくれたのだ、みたいな傲慢な気持ちを別に持つつもりはないけれど、僕はとても彼に感謝している。

僕は書いて渡した。本当にたったそれだけのことなんだけど、その行動すべてを行い、終えるまでに様々な回り道と近道を進んだのだ。

友人より

まず、五十音順の「あ」と「い」の間にある文字をとる。次に「い」と「う」の間にある文字を、そして「う」と「え」、「え」と「お」、「お」と「か」とずっと続いていき、最後に「ん」と「あ」の間にある文字をとる。こうすることで僕たちの全く知らない全く別の五十音順ができる。僕たちが全く知らない五十音順であるので、とりあえず「あ」と「い」の間にある文字を「a」とおくことにする。次に「い」と「う」の間にある文字を「b」とおく。こうして進んでいくと「は」と「ひ」の間の文字で「z」で終わってしまふので次の文字からは「A」と大文字で置いていくことにする。そのようにして「ん」と「あ」の間の文字が「T」となることでこの置き換えが終わる。以後、これから出てくる小文字の「a」から「b」、大文字の「a」から「T」まではすべてこの置き換えられた僕たちの知らない五十音順とする。

では、この文字の法則性を見出す作業に入るとする。先に法則性を見出した友人Y（もちろんここでのYは置き換えられた文字に含まれていないため、我々の知っている、いわゆるイニシヤルとしてのYである）曰く、

## 「Kor eHap Endes ukA」

という僕らの知らない五十音順で作られた質問に対応する僕らの知っている五十音順を用いた日本語としての答えは、

「それは福井県です」

というものになるらしい。他にも色々Yからはいくつかの例文を聞いたのだがさっぱり法則性がわからない。

## 「wH oAR eyou」

との例文に対しては、

「それは素晴らしいことですね  
になるらしい。」

「で、作られたこの文字を使って君は一体何をするつもりなんだ？」

と、ある日Yに聞かれる。それに対する僕の答えは決まっている。

「ラブレターを書くんだよ」

そう、ラブレター。恋文のことだ。僕はこの文字を使ってラブレターを書くこととしていた。どこに届くともわからないラブレター。僕がこの文字の法則性を見つけたことができた時に、送ろうと思う。返事が返ってくる可能性はないに等しいがそれでもゼロで

はない。もしかしたら返ってくるかもしれない。

「私もあなたのことが好きです」

これは僕たちの知っている五十音順だけれども、返事が返ってくる時にはもちろん今現在僕の知らない五十音順で返されてくるわけで、それを読むことのできる人間はYと文字を解読ができるようになった場合の僕だけなのだから、他の誰かに読まれたところで僕の恋の成就をY以外が知ることはない。

「そうか、頑張れよ。それ」

そんなことを言ってくれるYだからこそ、僕は彼だけにだったら、僕の恋の成就を知られてもいいかなと思っていた。

そしてそのラブレターを届け、そしてその想いを成就することができた今でも、僕はいまだにその文字が読めないままにいる。どうして僕の想いが届いたのか、それはいまだに謎のままだ。

僕がこの知らない文字でやたらめったに文字を並べ、それを友人に見せた途端、友人は声を出して笑った。

「いいな、これ。もうこれそのまま出しちゃえよ」

友人は僕に手紙を返しながらそう言った。友人Yが言ったとおり、それをそのまま

出す僕も僕だが、せめて何を書いたかぐらいは、今ならもう教えてくれてもいい気がする。

書き出しはこうだ。

「uikhFries huseDhideFhisW SRGfdiWFB」

もちろんこれは僕が適当に打った文字だしこれからずっと続いていく文も、僕はただひたすら適当に打ち続けた。あとで見返すと、よくもまあ適当にこれだけ打てたものだ。なと我ながら感心するのだが、なぜか全文きちんと意味があるように書かれているらしい。繰り返しにはなるが、なんて書かれているのかをいくら友人に問いただしたところで、友人は決して教えてくれようとはしない。

そもそもなぜあの文字でなければならなかったのか。これは友人Yにも、そして想いを届けた彼女にも、聞かれたことがある。僕としては届けたラブレターが誰か別の人の目に触れた場合、後で何を言われるか考えるだけで恐ろしかったからとしか言いようがなく、つまるところ、僕がただ単に恥ずかしがり屋なだけだということに着地する。それにしあってわざわざ自分自身が読めない文字にする必要がないのは確かであるけれども「私はここにいる」と学校の校庭に馬鹿でかい誰にも読めない文字を書いて人類以外に想いを伝えようとした女子高生もこの世にはいるのだから別にそこから遠く離

れたこの僕が同じ人間であるただ一人のために同じことをやったっていいはずだ。校庭に文字を書いた女子高生は意味分りながら書いてはいるのだけれど。

ラブレターを書くにあたっていくつか取り決めたことがある。

一つ目は、2Bの鉛筆で書かないこと。これは僕と友人Yには苦しい選択ではあったけれども仕方のないことなので使うわけにはいかなかった。目指したのは「彼女へ届ける文字」なのであり「彼女へ届かない文字」のみを描き出す2Bの鉛筆に、僕は筆を預けるわけにはいかなかった。

「2Bの鉛筆で書かれる文字が彼女へ届かないものとなってしまいうなら、この2Bの鉛筆で書かないことというのは別に取り決めでもなんでもなく、縦書きの場合文字は右から左に読むことレベルの大前提のようなものではないか？」

と後で先生から言われた。

二つ目の取り決めは、消しゴムを使わないこと。もちろん鉛筆やシャープペンシルで書いた時以外、ボールペンやサインペンで書いた時なんかは消しゴムを使っても消せないわけで、要は一度書いたら消さない、ということである。全て本番一発勝負だ。

とはいったものの僕が書く手紙は僕自身何が書いてあるのかわからないものだし、消そうと思ったところで何がどこでどう間違っているのかわからないので特に困るこ

とはない。

しかし、文字そのものの自体を間違ってしまったとこれは取り返しのつかないことだし文字自体も汚いヨレヨレの字で書こうものなら伝わるものも伝わらない。これはやはり宜しくないことなので僕自身この手紙を書いたとき、それはもうゆっくりと書いた。一字ずつ間違えないようにきれいに書こうとした。故に手紙を書き終えるまでに相当の時間がかかってしまった。多分、消さなかったから良かったのだと思う。だからこそあの手紙を書くことができたのだと思う。根拠なんていつも後付けだとはある歌にあるように、届いた今だからこそこんなことが言えるのかもしれないけれど、消さずに、ゆっくりと文字を書き間違えないように書いたのはこの二つ目の取り決めがあったからこそなのだと思う。

三つ目、家族に読まれてはいけないこと。これも変な話だ。だって読まれても何が書かれているのかわからないから。僕は誰に読まれても意味がわからないようにこの手紙を別の五十音順で書こうと思った。だから読まれないようにする必要もないはずだ。それでも僕達は家族には知られないようにする事にした。なぜならばそれは僕の父に由来する。

父は誰よりも僕の幸せを願っていた。僕の手紙を見られたら、僕の父は僕の成功を願

わずにはいられないはずだ。それは別にラブレターでなくても構わない。ラブレターだろ？がなんだろうがそういうふうには実の父親に自分の挑戦を応援されること自体、恥ずかしがり屋の僕にとってすごく困ることなのだ。父はなんの応援であっても構わないわけで父は僕がラブレターを書いていることを知らず僕の手紙を応援する。僕としては結果的に父親にラブレターを書く事を応援されているわけでやっぱりどうしても恥ずかしい。そんなわけで僕が家族もとい父親に手紙を書いていることを知られると僕としては書くことにとまどいを覚えてしまう。そんなわけで僕は家族に知られないようにすることにした。

いつまでたっても読むことのできない文章、僕はこの文字列に願いを込めながら一通の手紙を書いた。この手紙が全世界中にばら撒かれたところで手紙の内容を理解することができないわけだからこの僕の想いは友人Yと彼女にしかわからない。つまりこの手紙が誰か別の知らない人に届いたところで僕が彼女をどう思っていたかなんてわかるはずもないし、テレビに取り上げられラブストーリーとして様々な人々に感動の何かを与えることも永遠にない。

なんだか随分と恥ずかしいことを色々言ってしまったような気がする。僕がはたしてどんな言葉を紡いだのか、彼女に僕はどんな想いを伝えたのか、僕はまだにわから

ないけれど、それでも多分、僕が伝えたいことは全部書かれたんだと思う。こんなことは今更なことだ。今、僕の隣には彼女がいて彼女は今日も微笑む、僕の手紙ではない、他の別の文章を読む。それはきっとあの手紙のおかげなわけで、手紙を出すことを後押ししてくれた友人 Y のおかげでもある。Y があの僕らの知らない五十音順の文字列の法則性を先に見つけてくれたからこそ僕はずっとあの手紙を出すことができた。手紙を出すことなく、意味を捉えることもできないまま、時が過ぎるような事態にはならなかった。

今日も僕は自分で勝手に書いた文字列を眺めながら、その意味を必死に見つけ出そうとする。

父より

一歩進んでは二歩後ろへ、二歩進んでは三歩後ろへ、三歩進むと四歩後ろへ、四歩進むと五歩後ろに行くのだが、五歩進むとき六歩後ろに行くかと思うとそうではなく、五歩進んだ時はさらに六歩前に進む。つまりは合計十一歩進む。それが僕の父の毎日夜九時の日課である。

五歩進んで六歩進んだ後はというとその後七歩下がる、七歩進んで八歩下がる、八歩進んで九歩下がる、九歩進んで十歩下がる、そして十歩進んでさらに十一歩進む。これは合計二十一歩進むということであり、要は五の倍数の時だけ後ろには下がらない。これを毎晩九時、家の庭を一周ぐるりと回るまで行う。なんとも気の長い作業だと思う。歩き方に特に縛りはないらしい。普通にスタスタと歩く感じの時もあれば、腕を大きくふって歩いたり、一時期世間で流行ったウォーキングエクササイズとかあの独特の歩き方で回っていたこともある。本人としてはそれなりに健康のために運動として回っていると考えてもいいのだが、いかんせん、進んでは下がる。後ろに下がるという行動ももしかしたら健康的な歩き方の一種なのかもしれない。それならば健康のため

と普通に言ってくれてもいいようなものだが、僕が幼かった頃、父の進んだ後に下がる理由を聞いてみたところ、父は僕に何も答えてはくれなかった。なぜ何も答えてはくれなかったのだろう。あの行動には知られてはいけないようななにか重大な秘密でもあるのだろうか。

僕は今でもどうして父があのように庭の周りを回るのかずっと疑問に思っている。先程も言ったように、僕が幼かった頃一回、父に聞いてみたことはある。そして父はその疑問に答えてはくれなかった。答えてくれなかったことだけは覚えてはいるのだけれども、どうにもその時の状況は思い出せない。思い出せないというより、もう忘れてしまった。遠い記憶の彼方だ、父は一体その時どんな表情をしていたのだった。

だからこそ僕は父が庭を回る理由を考えた。例えば、父は庭を一周ぐると回ることで渦を作ろうとしているのではないかと。渦。ぐるぐると回ること、庭の中心を渦の中心となるように。渦を作ると中心にはいろんなものが集まるかもしれない。庭に散らばった落ち葉も、そして運氣なんかも。落ち葉なんかは中心に集めた後、箒で一掃きでもすれば、それだけで庭の掃除は終わるし、運氣も庭の中心に集めたのなら、後はその一つに集まった運氣を一回拾い上げるだけで事は足りる。でも、渦を作るなら後ろに下がる必要もないよな、と思う。進んだ後に下がるなら、きつと何かそこに意味はあるは

ずだ。

こうは考えられないだろうか？ 渦を作ることによって渦の中心に運氣が集まる、けれども運氣が集まると同時に悪運もまた、中心の何か所に集まる。拾い上げる時に、運氣も悪運も一つにまとまってしまったため、結果としてはプラスマイナスゼロになっってしまう。プラスとマイナスがいつでも一緒とは限らないから、運氣が多い時もあれば、悪運が多い時もある。父の後ろに下がる行為というのは、中心を集めるのを運氣だけにするための行為、要は悪運を振り落とすための行為なのではないだろうか？ 後ろに下がる。前に行きたいのに進むことも出来ず、後ろに下がる。こうすること、その場での悪運を使う。父はきつと、後ろには下がりがりたくないだろう。前だけに進みたいはずなのだ。もしくは無理やりにでもそう思い込む。その思いとは裏腹に後ろに下がらざるを得ない、これは嫌である。こんな嫌なことが起きるとしたら次に起こるのはいいことだ。「人生楽あれば苦もある」これを実際におこなっていると考えれば父の行動は示しがつく。もちろん、これは全て僕の憶測に過ぎない。父は僕に庭を回る理由を教えてくださいなかつたし、僕は最後までその理由にたどり着くことができなかつたのだから。それでも僕は推測し続けた。それと同時に願ひ続けていたのだ、僕は。父のあの行動の理由について、僕はある願ひを持っていた。その願ひゆえのあの推測なのだ。僕はその願

いを持ちながら父のその行動を眺め続けるし、その理由を考え続ける。

思えばいつから父は家の周りを周りはじめたのだろう。幼かった僕が父に理由を聞いたことは覚えてる。僕が物心つく前から回っていたのは確かだ。その疑問を持つ前の頃なんかはよく父の後ろに付いて一緒に庭を回ったりしたこともあったらしい。ある日、父の友人が家に来たとき、その父の友人が僕に教えてくれた。

「いいかい、君の父は、君が生まれたその時から、庭を回り始めたんだ」と、そして

「私はあんな風に回れないな、なぜなら私は、真っ直ぐにしか進めないから」

ともその父の友人は言っていた。父の友人はその後も度々家に来ては僕にいろいろなことを教えてくれた。父の事も、そして道の進み方なんかも。それでもなぜ父がそのような行動を行うのかは一切教えてくれなかった。

ヒントもなかった。僕は父の友人にいくら父の行動の理由を聞いたところで父の友人は教えてはくれなかった。それどころか父の友人は父の行動をすくなくならず嫌悪していたと思う。それはどうやら父の友人から教えてもらった父の友人の考える道の進み方に反するものだったからじゃないかと思う。父の友人曰く、

「あの方法では、きつと正しい道へは進めない。彼自身、別に正しい道に行きたいとか

そういうことを考えているわけではないのならそれはそれでいいのだが」ということだった。

結局のところ、僕が生まれた日から始まったというあの習慣、父はあの庭を一周回るといふ行為をどのような思いを持って行っているのだろう。

僕が後ろをついて回っていたことを、どのように思っていたのだろう。父があつて回ることを、家族、そして父の友人以外は誰も知らない。まあ、当然だ。別に父は普段からそんな奇行を繰り返すような人間ではないし、あの庭の周りを一周回る行動意外はいたって普通の人だと思う。それに庭を一周回るといふ行為は別に絶対しなければならぬという鉄則みたいなものが特にあるわけでもなく、雨の日も雪の日もなにがなんだろうとしなければならぬとかそんなことはない。雨が降った日は行わないし、雪が降った日も行わない、風邪の時も行わない、どこか別のところに泊まった時なんかも庭がないからといって部屋を一周回るとかなにか代わりになる行動があるわけでもない。そこらへんは普通のランニングみたいな物と一緒にのらう。

この父の行動を知っているのは家族と父の友人だけであることは先程も言ったが、なぜ父の友人だけはあの父の行動を知っているのだろう。もちろん疑問に思ったことはあるのだが、それは聞かないことにした。

実は父は時々、あの行動に失敗するときがある。二十九歩下がった後の六十一歩はきちんと毎回六十一歩進むかと思うとそうではない。一步多かったり少なかったりする。父自身は実はそれに気づいてないようで、僕がたまに父の歩数を数えていると時々そのような間違いを起こしていることに時々気づく。別に父は正確に歩かなければいけないとは特に思っているわけではないらしく僕が数えている時にも度々間違っているのだから、実際はもつと何回も間違っているみたいだ。

多分父としては正確に回らなければならないということよりも行動そのもの、進んでは下がるということを繰り返すというものが重要らしく、そもそも一周を回るときのための歩数を考えると、毎日数えていくのも、これはこれで大変な話で、きっと正確に数えること自体、面倒になってしまうのだろう。

小さい頃に一緒についていったとはいったけれども、実は最近父の見ていないところで父と同じように庭の周りを一周回って見たことがある。自分で一回やってみたらなにか父の気持ちがわかるのではないだろうかと思ってみたことだ。結果から言うとただ単に歩数を数えることが精一杯になってしまいそれこそ頭の中は数を数えることで埋め尽くされていた。

結局のところ、父がああの行動を行う確かな理由へと繋がるような手がかりはほとん

どない。別に何かあの行動によって僕が何かの被害を被っているとかそういうことは全然ないのだが、それでも僕は父のあの行動になにか縛られているような気がしてならない。

父は庭の周りを一周回ることと渦を作り、幸運をその渦の中心に集めているのではないかと僕は最初に言った。なんというか全然根拠ない説だとは思うけれども、それもだんだん間違っていないような気がしてくる。父は僕が生まれたその日から庭を回り始めた。父にしてみればそれは別に自然なことで、その行動を行うことに躊躇の一つもなかったはずだと僕は思いたい。一種の奇行とも思える父の行動だが、僕の父において、意味もなくあのような行動を行うはずはないのだと思っている。父はいつでも優しく、そして聡明だったのだ。そんな父だからこそ、僕は父の行動が決して意味のないものではなく、父だからこそその確かな前向きの理由であって欲しいというのが僕の正直な気持ちだ。

つまりは、どんな形であれ幸福を願う儀式なようなものであって欲しいのだ、それが僕の願いなのだ。自分の家の安全のための。我が家が平和でありますように、大きな事故や、大きな不幸に会ったりしませんように、息子である僕の恋が成就しますように、という父なりの何かの儀式であってほしい。

自分の家の安寧のために、父は今日も、明日も、明後日も、一年後も、十年後も家の庭を、ぐるりと一周、進んでは下がるのだ。

先生より

持ち物として2Bの鉛筆を持っておくべきである。そしてそれは普段からであり、遠足だろうとアマゾンの秘境探検だろうと宇宙旅行だろうとである。

これは以前、僕の先生だった人が教えてくれたことだ。そしてその先生が言ったことなのだから、きっと本当のことなのだろうと僕は思っている。

「2Bの鉛筆は正しい方向を示す」

先生曰く、2Bの鉛筆とは全ての決定権を持つものらしい。遠足の時には、先生の鉛筆は当初とは違う目的地をさし、先生は鉛筆がさした方向へと一人で向かった。

アマゾンの秘境探検では、遭難した時に鉛筆のさす方向へ向かったらなんとか生きて帰ってこれたそうさ。

宇宙にも先生は鉛筆を持っていったみたいだが、宇宙へ行ったきり先生は戻ってこず、宇宙船と一緒にどこかへ消えてしまった。きっといまだに鉛筆のさす方向へと進んでいるのだろう。

2Bの鉛筆でなくてはいけないというのが鉄則である。3Bでも2Hでもいけない。

色がついている鉛筆でもいけないし、書道で使う筆でもいけない。シャープペンシルなんかはもつてのほかだ。シャープペンシルで進む道を決めようとしたところで、訪れるのは特にこれといって特徴もない平凡な道であり、そこには成功も失敗もない。それを聞いた友人なんかは成功どころか失敗もない道なんていうものは、それこそ愚の骨頂ではないかと言わんばかりに憤り、そしてなぜかシャープペンシルを憎み始めた。シャープペンシルなんか憎んだってしょうがないのではと思ってしまうものだが、僕としてはシャープペンシルを憎み始めた友人が、後々先生から聞く言葉に衝撃を受けるということを考えれば色々気味の毒なのだが、それはまた後の話になる。

どれだけ色々な物を使おうと、2Bの鉛筆に勝るものはないらしく、他のその色々なものに従い進んだところで、上手くはいかなかった結末を、先生は何度も見てきたらしい。もちろん、まっすぐ進むことに意味があり、ぐるぐる回ったところで、願いの成就など、できやしない、と言ったのも先生だ。

その先生の言うぐるぐる回ること、願いを成就させようとした本人が実は僕の近くにいたりする。その当の本人いわく

「私のやっていることは願いの成就なんていうだけではないよ。ただ庭を回るだけで家族を守るなんてこれっぽちも思っていないし、ましてや息子の恋の

成就なんて、そんなことは私の知ったことではない。私自身、ぐるぐる回る行為に意味なんて考えたこともないのに、勝手に願いを叶えるためにやっているんだろ、と言われていただけだ」

と言っていた。

僕自身、大きな願いを叶えるために2Bの鉛筆の指す方向へと進んでいるかと考えると実のところ、そんなに大きな願いなど持っていないことに気づくのだが、それでも僕は2Bの鉛筆を信じ続けた。

「別に神様が宿っているとかそんなことを言うつもりはないよ」

これも先生の言った言葉だ。2Bの鉛筆というのは決して神頼みのための道具というわけではないらしい。テストの時に六角形の2Bの鉛筆を転がしたところで正解にたどり着けるわけではないのも、つまりはそう言うことらしい。

2Bの鉛筆と、3Bの鉛筆とかシャープペンシルとかとの差は一体何なのだろう。先生は手当たり次第探したのであるか、それとも2Bの鉛筆が正しいということをおかしら理論を持った上でその結論に至ったのだろうか。実のところ、僕たちはなぜ2Bの鉛筆が正しい方向を指し示すのか、その理由はまったくもってわからないし、そのことを先生に尋ねることもしなかった。もちろん先生は2Bの鉛筆でなければダメなのだ

というその理由を知っていたんだろうし、多分聞けばいつでも教えてもらえたのだとは思う。思えば僕たちは先生の言葉を疑わずに2Bの鉛筆とかいろいろなものを実際に試してみたりせず、最初から最後まで2B鉛筆一筋で道を進んできた。

先生からある日、こう言われたことがある。

「君と君の友人の二人だけが、今でも私の言う鉛筆のことを信じてくれている。それだけで私には十分なんだよ」

そして微笑んでくれた。僕と僕の友人はその言葉にとっても喜んだ。僕と友人は、先生のことをとても尊敬していたし、なによりそう、僕らは先生とその2Bの鉛筆の教えに感動していたのだ。僕と友人は初めて先生からその2Bの鉛筆の話聞いて以来、ずっと2Bの鉛筆に従って過ごした。僕と友人の鉛筆が一緒の道をさしたら二人で一緒に進んだし、それぞれの鉛筆が逆の道を指そうものなら僕と友人はそれぞれ別の道を進んだりもした。それでもやはり、2Bの鉛筆は正しい方向を指していたのだと思う。

たとえ二人の道が離ればなれになっても、きっとそのあととはまた鉛筆が僕たちを同じ方向へと導いてくれる。これは僕たち自身が実際に体験したことであり、その出来事によって、やはり僕たちは先生を信じることに疑いを持たなくなった。僕としては信じてよかったなと今でも思っている。先生の教えを信じたからこそ、僕は道に迷わ

ずに済んだし、僕の隣に今、とても大切な人がいるのは、まさしく先生の教えのおかげなんだと思う。

先程も言ったように僕たちは初めから先生の言った教えを疑わなかった。少しぐらい疑っても良かったんじゃない？ とある日、僕はある人から言われたことがある。初めから先生を信じられた理由、実はあるにはあるのだけれど、これを人に言ったところはどうしようもなく呆れ返られるだけなので僕としてはどちらかというと言いたくない。どちらかというところか絶対に言いたくない。

2Bの鉛筆だったらなんでもいいの？ と聞かれた。僕はそれに対する答えを持っていなかっただし、今まで僕自身考えたこともなかったことだったので、僕はある日、先生にこう質問してみたことがある。

「鉛筆は削っておいた方がいいのでしょうか？」

と。僕はそれまで別に削っていない新品の物を使っていたというわけではない。普通に毎日削って普通に書くためのものとして使用していた。鉛筆を書くためのものとして使用してしまっていることは大丈夫なのかどうなのかというのもあるけれども、まあとりあえずは鉛筆を削るか削らないかさえ聞けば、削ってはいけない場合は一本削らない鉛筆を持っていればいいだけだし、僕としての最優先事項は日々使う鉛筆に一

本新品のものにするかどうかを知りたいという思いと、そして2Bの鉛筆にも違いがあるのかという僕も知らないその答えを、僕は先生に求めた。

これに対し先生は、

「削っておくべきだろう。ただし削りすぎてはいけない。削りすぎると、とがってしまふ。正しい方向に対して、鋭利なものを向けるのは、私は好きではない」

と言った。そして先生は、

「目印もね、つけておくと良い」

とも言った。正しい方向へ進む前に鉛筆で目印を、例えば遠足前のグラウンドに、アマゾンの中の樹の一つに、宇宙の中の空間にも、鉛筆というのは目印をつけることができるらしい。そしてそれは後にその場所に来る人たちの道しるべとなる。なのでやはり削る必要はある。と先生は僕に教えてくれた。そして

「だから、持っていていいのは一本だけだ。その一本だけが指し示す方向へと行きなさい。何本も持つてると、それぞれがでんでバラバラな方向へ向いてしまつて、結局どこへ向かつて進めばいいのかが、わからなくなつてしまふ」

僕は先生の教えに従つて、今まで何本も持っていたのだが、鉛筆を一本だけ持つていくようにした。ある日、鉛筆が折れてしまい、紙に書くものがなくなつてしまったこと

がある。どうしたらいいですかと先生に聞いたところ

「シャーペンシルを、持っていけばいいんじゃないかな」

と僕に答えてくれた。

どうやら、書くものに対しては別に種類は問わないらしい。2Bの鉛筆だからといって書いたものになにか力が宿るとかそういうものは全然なく、そもそも何かで何かに文字を書いたところで、何か不思議な導きが出てくるとは思えない、それは迷信というものだ。というのが先生の考えだった。僕としては2Bの鉛筆に対してある種特別な感情を抱いており、2Bの鉛筆で書いた何かで失敗することが嫌だったので僕は何かを書く際、2Bの鉛筆で書こうとすることをその時にやめた。

それまで鉛筆一本で済むような生活をしていた僕も僕だが、そもそも先生の教えを聞くまでは僕だって2Bの鉛筆を何本も持っていたのであって、それ以降のシャーペンシルで文字を書くという行為には2Bの鉛筆で正しい道を見つけたいからこそみたいなことを考えると、その時ちよっと自分が成長したような気がしないでもなかった。ただ、シャーペンシルを憎んでいた友人はとてつもなく落ち込んでいた。何を使いに紙に文字を書くべきかを考え始めていた。

2Bの鉛筆が間違ったことはないんですか？ と一度先生に聞いてみたことがある。

それに対して先生はこう断定した。

「それは、ない」

と、最初から最後まで先生は2Bの鉛筆は正しい方向を指し示すことを主張した。

でも実は、先生には秘密にしていることがあり、それが2Bの鉛筆は以前、一回だけ道を間違えた時がある、ということだ。

2Bの鉛筆が正しい方向をささなかった。もちろん、その一回があったからといって僕が鉛筆のことや先生のことを信じなくなることはなかったし、一回間違ったその出来事よりも、僕はたくさんの正しいことを2Bの鉛筆が指してくれた。

2Bの鉛筆のさす方向へ。

とりあえずは僕もその教えにもう少しだけ従ってみようと思う。

彼女より

「紙に書かれているとね、読むことができないの」

これは僕の彼女であるユウが、僕が初めて彼女と言葉を交わした日の二つ目のセリフだ。ならば布だったら？ と聞くと、布なら読めるよ。と返事をもらい、道路標識は？ と聞くと、道路標識が紙じゃないことぐらいわかるでしょ？ と返されてしまった。じやあ一緒に本を読むことはできないのでは？ と僕は言った。彼女は「だから、私に読んでくれると嬉しいのだけれど」と言った。その時が初めて僕が彼女に本を読んであげた時であり、僕が彼女は紙に書かれた文字を読めないということを知った時だった。

僕たちの前には同じ本が二冊あり、それは紙で、そして文字が書かれていた。はじめ声をかけられたとき、なんでいっしょに読まなければならぬのだらうと不思議だった。彼女の前には一冊の本が有り、そして僕の前にも一冊の本があった。二冊とも同じ本であり、僕たちが一緒に本を読む必要はないはずだ、というのが僕の、そして誰もが思うであろうまっとうな反応だったと思う。

「ほんとにね。なんなのかしら、この体質」

紙に書かれている文字が読めない。しかし、彼女は文字が読めないわけではない。むしろ他人よりもずっと文字を読むことのできる人間である。彼女が小さいころ、誰に教わることもなくテレビに映る文字を突然読み始めたらしい、漢字も含めて。彼女の両親はそれはもう驚いたそうだ。当然だ。なにせ今まで平仮名も読めなかった自分の娘が突然文字を読み始めたのだから。彼女の両親は喜び史上最年少の漢字検定一級も目指せるのでは？ と期待を持ったものだったが、なぜか紙に書いた文字を見せると娘は首をかしげた。

テレビに映る漢字は読めるのに、紙に書くときとひらがなの「あいいうえお」さえ読めない。これは彼女が小学生になっても、中学生になっても続いた。僕と初めて会った時はもちろんだし、そして時は流れて二十歳を超えた今でも、それは続いている。

不便じゃないの？ と聞いたとき、もちろん不便に決まっているじゃない、とユウは返した。小学生のころから電子辞書やワープロで学んでいたので最初周りからは奇異な目で見られたらしい。社会人になってからどれだけ苦労することになるのだろう。と彼女は将来にとてつもない不安を覚えながら、大学を卒業し、そして就職をしたのだが、意外と思っていたほど困難な道ではなかったようだ。もちろん書類は書類で紙に印刷されたものがあるのだが、会議の時なんかはデータで資料が配られノートパソコンで

ファイルを開き、発表者はプロジェクトに画面を映す。日々の業務で書類を書くときは誰かにどこにどう書くか指示を受けながらでないといけないのだが、彼女はそんなデメリットを軽々と覆せる「紙以外に書かれた文字ならなんでも読める」という長所を持つており、だからこそ彼女は今でも社内でも貴重な存在として重宝されている。まるで不便どころか便利な能力ではないかと時々思う。

今でももちろん彼女とはその文字の読めない体質について色々話をしているのだが、ユウはある日、小学校時代を思い出しながらしみじみとこうつぶやいた。

「黒板はね、偉大だと思うわ」

天才の発明よ。とユウは続ける。プリント類はすべてデータでの受け取り、テストの時もユウの机の上だけにノートパソコンが置かれており、そこで文書データを見て受けたらしい。そんな中、みんなと一緒に文字媒体を共有することのできる時間、その一つとして黒板があったため、ユウは教室の黒板に対してひととき愛着を持っていた。

「黒板消し担当の時には、それはそれは丁寧に黒板をきれいにしたものだわ」

とユウはしみじみといった。まあ、でもなんとかこの時代に生まれて助かった、とユウは言った。それこそ今の仕事なんかはほとんど紙に触れず行うことができる。

「確かに主流は紙だけど、この時代には電子媒体が存在するから。もし電子媒体が存在

しない時代に生まれていたら、私は生きていけないわ」

でも、もしかしたら、どっかの国のどっかの時代は、文字を書くのが紙ではなかったかもしれない……。僕は知らないが。紙は紙でもどこからどこまでが紙なのだろう。僕はあるより詳しいことはわからないけれど文字が読める紙と読めない紙みたいなものはあるのだろうか。パピルスだったら読めるの？ と聞いてみたことはあるのだけれど、それに対するユウの答えは、そもそもパピルスを見たことがないという至極まっとうなものだった。

昔って紙しか書くものがなかったのだろうか？ 主流が紙だからといっても昔だって紙以外に書けるものはいろいろあったはずだ。別に電子媒体が必要じゃなくてもいいはずだ。他にもいろいろなものに文字が書かれているイメージがある。書道って絶対にユウにはわからない芸術なんだろう。でもあそこまですたたくと僕としてはなんか文字というより一種のなんというか絵というかイラスト的なものにも思えてきたりするからそこらへん曖昧なものだったりするのだろうかと考えてみたりする。

他に学校生活で印象に残ったことねえ……。とユウはつぶやいた後、

「あなたよりも前に、実はあるラブレターをもらったことがあるの」

と彼女は僕に教えてくれた。布に刺繍された『あなたが好きです』の文字。これには

当時、ユウは感動を覚えたらしい。断つたらしいが。

「あなたのラブレターも、私はすごく感動したわ。すごく刺激的だったわよ、あのラブレター」

ユウはふふつと笑う。彼女はいまだにずっと僕をそのことだからかう。正直勘弁してほしい。僕より前にラブレターをもらっただって？ そんな事実は初めて知った。布に刺繍された「あなたが好きです」の文字。すごい、と思った。正直僕なんかのラブレターよりそれはずっと素敵なものなんじゃないかと思う。けれど彼女は僕の方を選んだ。なんだか急に申し訳ない気持ちになってくる。僕の書いたラブレターに、その刺繍以上の価値はあったのだろうか。そんなことを考え始めると、彼女がこうやって僕に微笑んでくれることに、嬉しさと同時に、なんだか漠然とした寂しさを覚えてしまう。こんな考えが浮かんできること事態、なんとなく彼女に悪いような気がしてしまって、僕のラブレターをからかわれることに、少し抵抗を覚えてしまう。

他にも彼女に勘弁して欲しいと思う質問がある。僕が彼女を選んだ理由だ。彼女からは、なんで私を好きになったの？ と聞かれるたびに性格だとか顔だとかおっぱいだとか色々言ってきたのだが、真実である。2Bの鉛筆が君を指したから、というのはきつといつまでたつても伝えられるような事柄ではないのだと、僕は思う。でも僕は嬉し

かった。2Bの鉛筆が彼女を指してくれたことが、なによりも嬉しかったのだ。正しい道なんだと信じられた。

僕がラブレターをからかわれることの勘弁して欲しい理由が、実はもう一つある。

彼女は僕がラブレターになんて書いたのかを知らないことを知っている、ということだ。

しかしそれについては僕自身がなんて書いてあるかしらないのだから特に恥ずかしかるようなことはないのでは、とある日友人に指摘された。ぼくとしてはなるほど、と思つたしそれを聞いたときは確かに自分でもそんなに恥ずかしがる必要はないなという気がしたのは事実だ。でも多分、僕はなんて書いてあるか知つたらきつと恥ずかしかるのだろう。だってその手紙には僕が本来書きたかつたことが書かれているはずだから。

彼女とデートで食事に行くと、僕は彼女のためにメニューを読み上げる。なんだかその様子は周りから見ると執事とお嬢様みたいに見えるらしく、なんか恥ずかしい。ユウなんかはその話を聞くとどうやらノリノリになるらしく、

「いいわね、執事とお嬢さま。ねえ、どうせならお嬢様、って呼んでみない？」

などと言われるが、決して僕が彼女に対してそう呼ぶことはない。

それでも僕は彼女の文字を読んでほしいという頼みだけには逆らわない。紙に書かれている文字が読めない彼女のために僕は紙に書かれた文字を読む。僕としてはこの関係は終ってほしくないと思っている。

はじめは彼女の隣に行きたかった、から始まる。でも本当の始まりはもつと前から既にあつた。先生がいたし父がいた。そして友人もいた。だから彼女の隣に行く、という願いはこうして叶ったのだと思うし、僕が隣に行きたいと思えたのも、彼らのおかげだ。僕が彼女の隣から離れたくない理由は、彼らのためでもある。このことは彼女には秘密だ。